榮花物語

自十七
至十八

をんがく
たまのうてな

和書門
二七四七九
二一冊

内閣文庫		
番號	和 27473	
冊數	21（10）	
函號	203	70

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

ゑんがく
めづらしきかうじあん二年七月十四日に。さゞめ
さき殿へまいりたまひてよびたまひけるところ
に御ぜんにて御せ殿へまいりたまひてのおもやし
きさぎのうへまゐりたまひて
くまのとおもきとうぶんにてみづからの御めぐみう
御まへびのこたびはうるはしきをたまひて
たゞしきとの事にはなし
くさのよきはやさくてまゐる御の日よ
まゐりてゆきぞうれしきなどいふものを
御ひとのおやとめでたけれ。ひんがしのみかんよ

さらでびんぐしの仏にいはれバ仏の地ごくもま
なくぶんごとくして地ごくのくるしみをうけ候へども
てんにハ地ごくのくるしみといふ事もなしかハ
ぞかんのめぐりまでよのなかの上下さかりこと
ふり。仏ハいよいよ見ぐるしき事共多き也かん
乃中金剛不壊の世界ちきうをそめてさし。
ちふぐ乃ぶつやうやくぞとみな地ごくとのりの
さ海くりそてまいりにこさうり。それぞれ六道を
ここそ地ごくとらまへころものきぬしとみえたるも
いたびめでたくしてよそまいりさうり。地まもく
と地しじまけるとやさろをしききゆかし

りせんさうハかりにはかりごとのもとりこうたくみて
てめぐりておゝぬ仏ささふ海なり。それく乃仏ぐ
うの事よし仏ハこれかくさせ給ふぞみ
さびハうやうぐうご御ようをいわるべう地ごくと
こさてさせ給へりとれバその仏よりいはるり海
まつりをのかんしかりうんうちへてん
上人の法楽人来人の仏を地まそでんぞう
をしらぬ地ごくのよみ七そう百億の大千世
くさへとかくでもてよの中にみちたるひめの仏
りうざなんと信ぞうらしも其さびの仏ぞ
さとえどにさうりげくのやうぞくどる

まくらべかりしくらの中までもびえなかう
たのしさかりやじごくやみやうやうなん
あぐがうさきぐハとりありどもうなど
かひるきくもわるにさそうるのつく
き海もえぐと流つなり。二三日をきて試楽
とひふてとせる流が代日ハあへて今まつるべくもお
らさなまバどもふさくかくろうろくこまのい
かと流ぞ上八十のそんなかきる流えどりそれ
のりさとのおくつぞらうろさ海のそうじう
わなまなり。流ぞうのかま人のもちうわ焼い
ゆ爷てまふ氏きひ人さものうちかく。あ流く

きせ給日、あるもとまじバおめかりて。おおびの
れわり海がふくとやそてこみれごうみもい
みじきれのりとも。よをとのかずんかとて
しきこともとる流まじバみや。どふハなりけく
とれてひとあなりるて。みあやしのとのとも
わまうとあうまでかまへちうらくこそうり。
くくいてかんそうまじもそうてのをきを立ちとの
給を流まバ。みえもいそね切ハ今もハちうかまし
て。氏参日ハえまいろ海じせまじバ。しこううへて
をふまいろうなり。かつ思やうと流うかしもん
ならりんとるなり。ぬともを給へとて。ともとうも

わられなくえこハやうふもかれへ。てら給ひ
たゞとあく〳〵の人〻世給て十三日のうかりぬん
のよおちやは有よかへし御せバひよのれらる海
みくさ〻て世給。ぜいぐる海をとみあみのぜご
うのみのらたかるさ世給。れせんさらたこのござ
うのめひまし〳〵ごろのとこうをとてぞかれ
しまれ。らまるこいこまぐうの御ひ今まぐりんなく
どのまくる世給。ひとぐハらたかれ〻海せんだ。
うちのみとのんさら今へんぞやう人あまたぶるあ
なかのよきくまいる。給をとも御てしかせころ給
ときう八ぐんあぐしのれるまゝみくぞつる世給

おくさ海りしよそ御し〳〵ぐうの御らる海の八。二
てらぐのくれさいゝ給。らまるこいこまぐる御らる海よ
ある一子宴かへし海し。父のれそう讃まゝつり給
さりしらやくのめでうおのく二三人れそでまゝ
なおきめのかへし海し御るやたにおもしきのみも
むまりつゝ世給。わり御つかるし御つゞみまで
せ給ひおぼさこいこまぐうのめでたくされひんぐしの
らうたみうみのさるあつらひみなはポてゝのかん
のみやまごかへしまれ。わちてゐぬうのみあとる
らうみさらうんぐくおのう人かへしまれ。らんざう
のりとのらうふらふ。うちたのうえかへしまれ。

すこしづゝしづかなるのちのちのうへたのむ
こともわりなきやうなるのみなもとのしらかはゝ二位
らいやうれうる海二つひきはぐともそえしいふれ
らぶまこのやまこほきてかうゝけくる海のゝ
ゆもかんろいはまかる事いかにぞの御事人はひがし
の所のらくびいは世話て世の中のくる海ともま
いりてぞのえるべきやうまゝことて世話ぞくべ
こさやむじしふされくる海ともこれこそぬきこ
まびん人の心海らりくたうしもあり給べ。のみなと
のうこのこゝろかしふでいこあとしそまこもそのた
もん乃ざふこゝねやうちてこゝろのそこのそこ

こりまつるべきなればなりくはたんなりまつりんごや
うぐうしとぶふるさてそこらにこそなかりて
日うらくはようつくほどふかくくのかよこうば
うこりのさふゝ無こざ氏ほどかみ世ばこ
もそのわたまさりさむめぬりまでら氏御ふ
らむめ所かゝうつまでこち心くちだちこ
あへしこちかうえごかでのを地てゆふ
どのぞそこのれこらやこ山とごのひとえりて
さ海くわろるでのそ世話つりえもいふれ
めでうさこそでくち所まとのうちかてたぐ
しころかんるいかゝやさてふまごともえこ

こゝろへそら中へのぼりまたおけ。なぞ〳〵このひ
きたるときがしのりやさわうふ。さていりうそえ
なへしちごくてらバらのうらがのなぞうわ。これ
ともふわりんでしゆかせさびりうこれなそのひ
ひはくもとだいしりあさご。しうこれなりのだいのえ
くゝおどりしみなかやなり。びくぞのくわやのはしこ
ゆらばかりこのおやもの〳〵とのどりぞ。いひ
ひとなくゆかりなはかく。このかたの入よかさ
孫さ世話へつとぢまうこれなりはなしこそ。
ことうめばしなり。このはるくくこゝおハ
世さ話話つるあるをわし。ばみなこゝろくにせさ

お話つるばかりなで。いゑ〳〵ないがぐらうう
かくしうえとおとし。これもこの入ゆくこか
とりもどし。これのへなるぞのおのはう。これ
ぐくをのぶらのたのなどのはなうくいよう
世さ話話つりたいうつゝろふこれしそのハ日
ばてのいとどこそんどなりわれとこうたハえ
うこなきこなりもべしでん入などのがはをとも
やしふまうてしはなしえうまてめでたし。
げく取のりの孫がも。やさそてあうえをハ
えび助しはし。この若えこをのどもわなさど
とみせうむどろ後にふ。ゆきへちうまいりわれべ

きびしくいましめて。つまもこうしのきこ
せまくの孫法師ハおろかなるこゝろをおこし。
いそぎそてらのゑとくぞこうらにそれたる。
よきてまとのたりけぶちの御まへにいりて
あらしきよ御らんじなましかばひとりなげ
かれどやうにいこうねば。おもうにかへしおさき
ころめでおはなれのかなしさみてこゝろうくて
乱聲をまけしおほせられかつぐてんう
かれろくしくつかろおそしそでごふちゃうそう
のおひしまもしまさこの僧のくてもうみれ
ておどなげてふりきさむしけうくおもさしまし

よろゆくじよ。御らんじかしても世話へいざや
ざうきょうみつまのろうらうのわがひとめ
つまやさころ御らんじやましるかつくおさき
ましうはめすとそまいげんかそし、西てんりんい
ら世話御しのたまのあそこのらくつまやごう
どうさそつまりひいでぞうしおしそわたせてひ
びさしものゆうふかり。せうともさ御びなう
ちうりことをさいえをいよび御らんじもう御な
りこの世のこくかげまかいいしゆ世話てお
のゆうをんのさこのらう。みつまのさごらし
ふれうしませてかうしき給給。くらんだくどあ。

はうこさのまへをまもって世話してやるぐだり
ろとのこゝろおりまして ひんかくのさだめのよ
はなはよくひて おりまもと。はなさのまうどの
ふかうぐうの出産ハ世話をもはれとめのかた
ごとを御まへまでえ。はつまつて三絃ひとじやう
のはなしとて絵話つゐ。ハはなこハなとのしかう
しやうとり大盃つゐ。かのしはさくの御かん
もどうとてぞかくるべし。おうぢてしまのぺらよ
ねさせ話べきまいハ。ぐれぐくどのうちのなとの。
はなしのこゝろをもして話がうへの院まへ
かくさとの御まへよまうて世話てかづまを世話へハ

めうぢうどのなんとそてまはなして世話てはかたぐ
せこゝろてかはあらせ世話へもどりかゝりなるそて
まはらく。くえのごひめ御ねさ御かり。みでよの
はおりさ御のいうぢうそのゆりめでさく
おそしまれをお。ちえのはまへまのつくりふ
なんそて御内ら世話らんと。おりひ御りまつて
もくろへてさゝりもよあり。みでしおり
まのしをよ御まおりしまっせハ。をのくおまへとどぞ
めちゆり。くれぐくどのうちのなとの。みなさま
らひ話うちのなとの御まへふく。ごむやうがり
のおりて地ごゞる御のいふうめでとはつ。安

のことゆゑにしくそえし給ひめのよのか
りしのたまどてしはさらべきさむざしともみえなさ
こわきておりのまへてもちわりさ海ぱ流づく
あらはれてだうせさう一座へり。あひしてわりそ
うちぐくのぶやうさひわりとのよのそえし
てはる海う此は給ひてはしをんのとこかは
えんたしきてわ中とひつせ給ゑくるまにけん
めんのかくば流ら海門らを給へり。ゆやりじ
うひともやうおめそでらうてつせ給ふ。ぶやう成
ふわりさ海こしたまひと。いたじうなまめかう
はしらり。たぶらりえじよりゑやじてんせう

人はつうまつまつりぞて此やにまくよりて世給
ぬぱんさら人へいきとかのれいぶよのひんかしのひさし
ふ此さ給ゐでんざやう人今よちぶへぱよしの扇
のまへあかりひしそろもよはくさ楽やいおり
し海よちてらりぱ此ぞとこもやくのとのおかく。
あかし海よひしそりてたる此やきとうらと八
おかあやくの孫の幸樓どもつろおうくだ
こ給くしくてみかその此ぞてのそらのうち
みくさきも人へこあやかてもを之のおまへよ
此屋よそひて。ゑ人のおまへもさうぐくもぱお
くしまれたのくおまへも。そくのかしこにおかりし

まんなかのおまへのよふはふつゐじくじ
のうござさふにそくぞうふえもふそんめて
そとに白蓋おゆひうりぷなつま礼盤そえた
りしにはうたまやくのおまへよきのざもまつらせ
給へりめでたのなつまおふしさひまりごな
どいてゆまかうぱとてそろわりてせさ給
給へりぷんさうへてんじやうへなじみなされ
まいらせ給ふせうそんじやの堂みものがあ
らざる肺臭をしきぞんこちやうじやのつな
みもおろしまれなつかんじさざもるま
こやくはるさぐのめでたのんらざもされと

うがもてんじやうのそくせんざいのうのあそぶ太
ばんしうぐうの深秘をうるぬのしきも
くやさめでうらそべてとふのうり給へなぼ
のざくられりつてみそふとはまへのうきよハおお
うしぞなるてんじやうしくかなまこ得ふまれ
なまたのさうごうのちぶのさんぶそうでう
はらうそ海おそせ給へりのとうにかんのうら
乃わりさ海をはられどもれハぷくのともなごへ
もいしやうのやうにさうめさそてつけのうび
さそのうすまてつろくのてらとそのふれなを
あとおいさりぞのへうふかりわられさ海

なりびそけのけびりきのおりてまえりし
くりぽ東西南北のはぶこぽきやしごうもと給う
までのうぎうおりて天一ぶりせんいとみをさり
いきのわざりよう人来おりぽえきどん若羅
網かまりもなびしやしとうおりてがせ多
をまごもらごく緑玉珠の人きがたかり
のいろかりぽ瑠璃樹のたとやうかつえざいぽ
いきのそこにみていなしやうしうかうし扎ぶ
さうふさてかりめべしぽ緑玉珠のしへおぽ給
こきこしきうとかうる上のう人きうかどしぽきん
ごんのしく姫うきわきのりみぢのでうしぽ虎

魄のちくぴうきうのなうとうのかどうしぽ白塩
瑠璃のちく姫ものふうのゆいさとかひうるごとくぽ
うやくはさ徳でうぜの人きと姫をパぽとのかで
金玉のさうとおうふ七宝の擬金のいをまよ
こきこれにしぽざりおうの姫ぽう人きのげよお
そぶぽくまがやくあふむしうのとにわそぶらのは
ぶうとれらんぜんべ七宝不の宝殿ちる宝
樓玉珠ありとそうえんちられべそろくめりぽ
うつくひくりてそうのびけみてぽ天上一如石全
猴の棟金宝のきびうきいやうのりしいぽ
あやくのざりやうとりてやうごんおりぎり

せつぽうろう、まいりうやをとせとびら
きゝひとこころとはんせんれべき八さいのやう
ごうとう給ひつりぢやうがきの摩耶の
うきようよりむまれさせ給ひてがんぶごぜんおん
ござひのかやうそうあをくゆわむしゝそ
まはりきうようもしふくぢいさたのしと
やてぢやうぼんしゆふうかうしだいれ給ひし
ふぢらいそのあゆかいぬくおもゝしまいらちく
かまこれをいぶさうしにはおがみてどうらの
ゝふぐのとゝのひとりもとめどとりあへて
又百人をへさて御つり給ひつきれどいつさうり

ときぶはんをとまうゝねがひをのぞみちやし
なさせそまはれんとおぼしてびさんひ
きていぶゝしそ御つり給ひ居天妻ーて
ぢめうらうびやくしとがんとしてころそまはり。
はち十九のとびのえさうおそ〳〵。二月八日忠
秋中にいぞ給ひてぢやうをせさ給ひてむま
やのはむまをいてさはらよぢのうひろうり
まいりされがまゝぬじんそこうのけ女み
やのうちゆつりてみさぽまて降魔成道
は梵切利天よのぼり給ひて摩耶をゝきを
しゝそまはり給ひぢやうそうじもの涅槃の

あつまりさんぐうこどうさおもハさせ給へり。
ちうらみはかぐろしやう去をの音ぞれるこそ
つきうゑをこれハ志まてんくりふのうゑて戯志
もどこれバごんぐゆりどちそしきりぞやうく
うそけどこうそよ流り給へバ中ざんさうく
いつめ志つハおつし海にて大日ふよりいよへおつし
まんひろもの分つのきを拝みのじむどくふおそ
むつをやうと志やうごんぐそくし宝幡宝幢
宝瓔珞上下よりふみかうもつてかしこ
やどりげもうう五上比のとよ大おつまんたが
の分座あつし毗楞伽宝とハおるげ百かく

の文ねハふくせきりぞほまんぼせんのそしおりてむ
ゆまやうめやうこそふへてりぞよろうくとえり
百とくの大宝摩尼どうござまつり大千界の
日他とめうりんにへおるぞごとし無盡けまま
んとくしやうごんせりふのいのざれにへよ
して法報應化ふんおくさうぐうくそくし
給ぞ見頂のをさべよりうる千ぶく種のおるさう
らまでそらへ給へり相好やかくぐべらいれ
ひごうとここざのおうざふんは普賢文殊ぞ
おしゝ海及文殊ハ又せいゆまやうきんよ八万さん
のおさハし給ぞ六千の比丘上首ときれ給ひ雲也

ここにはこそなおおしまに。又かんでんさいしや
くおりしまにかんけいうハ磐ゐとふぶりよの
ら世話をり。その、おかま八ハにれ八千のかゞりやとんくさ
てまにつぽてんまうゆめしくてこせ話へ
かしごくらく世らひこれは浅きてもつふくと
いくじゆりくそのとこそまゐるぴ白くま
もつてうくハゑや浅くうそてまひてうざいきん
とみぞ充るぴかくきのおかま今は幉细のとがつく
家おかじらてんのこの体どもぴ○のかざさご
もとも之はたそてまつる世話をり。きかわう
ともそまれとにうりきかいおふぐくぴ七かうぞ

もそくぞうまこそてまつるりうしやゞもよろ
の御のうへのかゞるやさうせ話ますべいさ
やうらんじうちそろくまかまそくこりけ
にら神さびぶらふこれ七おうとりく強盛
せりこぶ○のそぐやうかふり日のじまの
こしれぞうちにふつかゞにの○のあしきとよ
ふうとひざさよびもぞくまさうどゞやうくう
こ御うまう佛のらふ下金剛指とござ
まてこそゆんさ、おかきこり。のきんがい
さんぞうの今もくそくうしらてこうとの
おうかはえにくるしさふぷの子○のあと

かるとねてさくまんちうまつうてぐらしり
つきほつんでもおろえにてんぢくのござん
やうじやのちうちやうのそくまみよござそう
じやうぜいやうめいわうまでやうめいくはうわ
くわいおうらくとしてきこゆ大王ぴ后まうひの
侍ころよのしゆとこてひろしこうすわう后
ひ八歳六にむまろあり。そのよのしゆよきあ
よのおりくねさ國あり。てこのみあこ乃
おきつりまはみんつどのそくぜうぜんせん
ドのそくじやう。ふのござとや國しふでこ乃
るりいつうそうじてあるどもじめいれにも妙

よせまいておやのそうどものしてらいさよ
ぎよぶびひとしくびしさと十女人にぐ
ささらかうまこのあらがつぴさ國ぐいでう
ほさくしくてゑいざもぞそさかりぴろく
のうえはりともどひかつくれのひさうえ
ひおりさ國つかさくらうみてらうましまうし十
よまうまのごかしのいておうしどあるかがろ
うりりうあひさやう流さうろぴ二三人
て三歳まこさう在あていふすのどもりさ
つまゆふこおのての流らそこうやう歩
三四人ぐしらぴどのくうくひのさぐしてま

いろはを弾中大童子が役でのしやうぞく
してそのへうぴらのはなをとをりやう
ありとあくかいまりさうかどとしそう御
しこゝもけさとわろきおかくわそくが
してゐるじうはさこやさうはわ下つう
又云人いでさてみちとちうひはしさあれ
りしやことゝいふものゝいできあつ講師
讀師のさゝげらまいてうしふのりてまいり
弾ありそう登詠篇にあるへてかしこく
じのさはよせきふひやうぶさんじやうあぶて左
右列ひきさてわかこはいきさうう。樂所乱鼓

えをいふともどうとこもしさふしぎのさとも
ひきされまいてまひいそくまつりびやうへされ西
ばうけど。これ世のことゝもみんてにほどこまそ
うらみなとのらつらぴびらみざとの
へてあるびはできとのくされ小そんつ。らこ
らのそくさちまいりかまへるかど。もかゝも
いそまいてあるぎぞいぞてうぞ。てのかりと
もみなかかんかんしやくじやうみなしふくよ
しさびてつてあかりの。うのけさあがくか。も
弾むしうこれびのはずつの恋あくんざ
てりてまつまろりのどもあまいば。わざやうふ

はまよりぞ、ぐうとき八さいのせいし手を
おさめんとのおもひあり。そのゝちこの書写にあ
くのあるくれいちとられけれバ、かんのうら
せんぢんとさいのかふかみちにはいりて、ほそく
のちにかゝるま四方にとびはふにれそう
らのさんもかくしでも。やがてあまてぜん虫
おきのふかりせんのまわりあり、まり経
なんもうしやとらぬ。三ぜのちよふけのせけ
おうのごいきもかうまりてくらんぎふ
きぐちがけうかさいのうへふくさんぐの
おかりのひともをずとはくゆさいりくえへ

のぞりのまひどもたえごくらくゑとうたか
とぞしきりにおもひまして、みんなおほくそと
おもひやりまてそのゆへにまふのとめで
これぞやくわらひまてびんなぞ見たまふ。
楽天のうへのにおもいとどいふうなれし。
これみなのりのあかりあつひかてんふかんせべし
いり乃ちな雅歌詠をもつてとこゑぞさる山大樹緊
那羅のおりのおとにふかぞうへてぴらんとん
音楽のきよくみだし一ぜいりんかのつとをまつ
妙こともをもちて、まのとめまいるべきうたはれて
めぐればこれざゐるずらの初でなぞのてろひと

あつかんそてまいつぷくてゝてんじやうへのぼりて
ごやうかくもとがりてそれよりえいさうせ給へりつか
やぶらへいらいこふかんとうしもうちはさき
らゆあかそこもろそうのまあやうぞくのいら
かそのへさせ給へりそのひろのむらご所とた
けひとしくむまびさじくりごやうくごうおそ
つまそひぶりのこ八ふ大ぶうのみあとのひさ
しふはさつみぎのくふかあぶごぞくのびん
ぐのひさしにはさあそのはさくかまへの
さうのことぞをもろべしぱらじの上の
ざさとうじうはうまいり給へりけいらん

をんよみとみやうらのけんどうやうあくてくよ
やしひちう廾ヰ給ぬ六さのせいえうてさきま
まふのあんざれ給ふごやゆきりうろげいまじ
うめでくゝうあけじのへおまへさ給ふのあぶ
らがきさせ給ふとゞもうつゝとうふあゆやを
のけ孫九右のくわんごあとゝとゞめてんじや
うへ廾人うちてまゐりしどちうあ七そうは
ぎふ百五十人のそうよみけきとうてとう御梅
を海あけわふみでゝとかんとうりんぶ出家
ことまあびてとゞくのてんじやうへんど
ゆぐ又あぶどうびをうさせ給へりぬさ

あやのちぶらんぶこゝやうでとこなひてそやじ
内ちうぐゞのてんだやう今ぐらんじなどうひますゞ
つそてしふかうのをもてしつり。おのこはざく
くさうふんざでゝ中ぐでつとのくちぶさうぞやう
ど志てそやじちぶさち女ねなどもとりて。御
ざ御のをまゝうてはざふかんのとのくれらき
のさうぐゞうみのへ。いざやうど志てさうぐゞうれ
もをやとみちなどよりてゝおなどしとんふき
して御ハらふかそてとおりふれどふ。こ一でう
ののんのれさうしきより流句もてんだやう人
しちりんしてのりをりゐるもと。ぞべてこれ世よハ

まことあゐてとなりぐらしこさり給ふの御で
なりとも〳〵のへちらハとも〳〵とおりぬべし
これハ然れに乱みなかう〳〵せさせ給ふとなり。
さうたく〳〵ずごむりしみなおうざうことなり。
い御ゆくもあおりざいてやとうんハおりふへおなり
ほこ。これそうふしさまざきじめうらそうそうがう
さうなでハ御ぞてれでしざもそのはぶ。いとめ
やもうしがんそうなどのいさらぐさこなもおうう
ぬくんそ。ぐげざそひとのようびさうびり速ちかつ
みんふふおう給くまうおのハ志けなりぬ。おさ
ほとふなりぬハとのぞさの布施福などハりそ

はかりをそへてかくて世話にくらへてかたる話をお
よそかゆらふもいかしくらはつ日のあり様
を世中のさまにあはせはかりくへかかりへし
そうあうふも。きちらくことさうくへはうく物
えうくらん。これからのもおもしろき事さまさう
のおもひくふかきもはくかくとも申へはうか
ならひかことおんとくさりけて。日くらかし
とも内ことくらいて世話とてりかれてさも今の
様てんたかくへの内をおかしくいしくれんよ
いれこ候うかうさ候ふとさうさせ話へりのかふ
のかくるの山のこととはそらおかしてふかさ世話ふ

れかそけつとまりかろかりしさことともいは
おかしくにあさせ話かはかくはそられけう
まれまうてことさもかううり話をせさ候て
のまろしひそもおくらんとのくおまへの人かまる
いとりにみてさせ話へり。おもしろいかまちの
そのいろうまうちりつまと。こなくかな
候ふくて世話かへささとのくおまへこよひさ
こなかりしさ世話ておきそこの人はてんかとう
みなおかしき世話てお。もとれよさかよくて世話
かうさせ話へかてとみさくてみなと候へせ
話てやそひろの人はかなかさうおかまりま

まんればごうくのかぎりともよりは、おさめどもおな
じことなづくわりなむぢうきもしんげんのやく
のもぬぞねさぶらへばこふもそうらうさせ給まず
こさぶ。二三人ばかりはべりそがめさせ給てみなれば
やうおぼし給のうふちうくさなおいて巳
うおぼしめせど。こゝひのさかんこくハむかし
いかゞおぼさせ給めまし。ばごつくのおやしどもまう
まさしうさふ。おれけのれひりふれげてかわざ
つまとりそてはやされめこてまれらんぜられてゐ。
そでじうさればうえしめされほうつくに。やう給
のぞうちふかはさしとく御あくてりそうろふ内

ぞうのぞおしふかれけのてくされ給ひつれどお
どちくうんそてまいらせ給。おさなひんかしの
ばぞうあど。ぬんそてまいらせ給つうじくめでゝう。
さうそくおほぞさら。れ云しさんふひひさやう
ぬ。よろみさうひきだかあるふ。どころくのみづの
うる御ぞものごうめさうさへめでゝ御ん
ぜうてふぞふ八千四日あれバ二十三のひぞうかほ
御きんぞふぞこあるせ給を御上とさされどお
まで。のぞむしわうばさあどもろハのそ
ふさあしめされて。いづうじうそとうおはりめ
さうてふ。ともそねありのとこうしめもぞ。おわざ

ごくふうの、おまへおつしゆにて御んかゞみせさせ
給ひとみなそゆへのりやうせ給ひをはよくりゆく
ものまでおもれよりのりうみなそまいらせ
給ふおごさらけ御んじみそまへらかくへどバ二十文
のかゞみまいり給ひてさのさ所の給ふり文
御んどてござらくとのそむくへりしきゆりしとお
やぶそおかばらくしかうへ候らりのかゞみいどそへ
てござらくふとくりとすゞと給ふありおかどのおぼ
しあらせ見なそてまつり給ひどの、おまへのれあらと
さ候、かゞみまいのれまへさりもうのりしうめぐしぬ
うかんそてまいらせ給ひごよひのれさへめんとおぼ

きのゆとくとうまつらう、おかしめさるべし、おふご
とくもさこそきさせ給ひて、一かんゑものれありさ候を
見なそてまいらせ給ふへハ、三おがくのれさるやうに
おかね候う御さて世給めるふハ、ぐつしむすれば
世給てのち、二三どおくりそうせ給へまいらバ、み
おうをむかそうめでこうおてとくりみを
うめうふハ、おつしゆをさけに二三寸ばかりた
ら世給をあらでふかおもし御をべぞじうかく
らくにあひさるうばさ、おそてふつほらそをいぶ
むど、おつしゆとろしこう八十一よおもしまれ
らめ見なそてまいらせ給よかつてかたくるむべし。

いはしらその身せ給ふ後の世の人々うく
のこゝろおつし御　おつまござなきまじ。しら
りのかうかしろもくくうつてとんくさせ給ふ。大きや
のおまへはゝらやまおもうかくやふかそんなそ
まつるまのいら世給ふてましうてぽうばう
ほくうかんそ御つて世給ふ。ぬれどよ給ふ
うけふおゝおほめしておとのごりもぬ。おまの人ゝ
のおりのがしろもの外ざくをえんけしご御つてね
むじうごさぶせむとおうしさことばりあみ人ゝを
まてとぽえやむくらをう御つれしこら
れしきれくくて女ひとなうしら御めから

だいれいがみなおとのおりのまもぬまさこの日ひさし
りぞくみのとれがらしごさの外れんさら人ゝまう
せさいふからそうしてさけまうひあなしかまえふ
ろとのぞうさんぶらみなちかすかそてまいらう給ふ
ゆりまふのれありさ御ひにうしうなるまあるまふうしうおう
あさうふみでどりのあまとうり給つうかくりの身え
でせんへはやさとつりぬべしうくてくえんちらくどのを
ちゞめそれまうりてこことのぞうみなかおり
御さふみなさうべさふのそうりなくまのり給つり。
ひれじのとれがうもふなりてぱちう母しせて
そ御つかぱろかはちやうらえへこうぐうた

てまつらばさかる中にてうんのよのそてまり
かもて中なる一かんをおそろしきのほり。しばらく
ぬるまでのちよるをおしちひさきちをす
まいばかりとしかそこぬつりきればとのゆる
ぞのせさとおちいりふたづまていでころ
れのりかひあたさぬさのふたまですぎぞも
のめばらかふみをしふ。されさらさせんかるへ
くかでしつぱりかでいかなるべきうるふ。
ぞる人ぬふちげれ人るもばれ。てでれ
のうぞなとなりて。ひさふくおつしよのもとのば
らいしこてせ給つらく。ひとつのことなりわりけれ

かんさらべ。と地をはあまとそるなる。ぞんむかりさ
てまへじぞくむしくふとられ給つら。これにくく
あらみいもらのあてきぬをおきまほうよにめ
ばらかうことのさあしかふ。これらのむつくさこ
え給り給てし給三ぜんぶんのきされ、おいれ
やしあをきとなり。これからてふたと七人までハおもべきさ
ずつとおあれど。つまりのあらしおがおがくの給
女中さらとどふ。さされかくあつらず世給う
ちおんせざりそうと。ぬので三そろわおそらし給
とふかまよ一とうろいとまくらふよごみくぶ
わそときうえさんだつうと。さされぐ○みゝく

「おつしゆるとおり二かんとやらこころざされしも。
こころみとひとしきはくるふくかく。年宮年
爵をえさせ給ふてわきまへがたにひとつにうけるまじ
むかしのゆかりもわかるすがしくてをなりやとう。
ちからひきこそ給ふかへれ。くしてわかるだ
うふしゐて世給ひは給ひともはへなくども
見るてそらも世給ふよりごこうせてめで
こう光にもさうぐやうの日なでかいて人さへ
がしかれがま給のどうふも見えとそてまうとせ
給ふぬよりとうまうく光にめさうとのへかまふ
はづらくのそうどもめでてはとこそやうぶも中

わげさせ給ふやくのりんのとれとのくだされ五十
ひとつはそのほうたせさせ給ふてうのと
たりつ陀さん。わまきの院からふたりまゐせ給ふ
のこゐてはうしくしそうぐる小一日むから
のとの大掛などみなうけをさせ給ふて。そての
はまうけをあまさこともあまとぞよにゆう
りあつれんとさせとも人ぐみえべくさておもむ
ねてしくすどかまつりうれけかせゆりつつ人
はべりられぞくして世給ひわまへれのから
みなはつうのとのこふはらうぬまさておさ
させ給ひなぶろべきはそて心みてさなでまうせ

かれバいふ風情はつくりもなくみえぬたぐひなれ
おもしみなれひみぐるしてりこまりをなさぬ
てなまじいにいとふびんなることなりとておう
でくよさりの比とうりともなくてうつまじりそん
なりめなどや所じのくおまへなれハびの比なる
小袖のり染つゞくふきさうなるまじくもんべらん
しくようしかはなべてのことハいとひなりもんなら
んぎのふよみなれしほさうかとくもでは此ろ袖の
うりよみつぐろ物どものやよろもんでうんとぎさこ
えさせ給へバそ袖つりけり比ぞとゝとゞみなまと
すとしぞさせ給ひつゝしく、おゆかなるものいへ

おきふもみなさえてもつとせ給ひくろくもひさき
あるりへなべてよわかしどとこれをいうてうぶ多ひもだれ
給ふて此とをとなおひきとりとせ給ひてきょうして
給ふおりよきさ袖ではそのふうろうりしとども
小袖さりもしいか袖めしうるともうろにほく念をさ
まじくちうるよ文集れのふかりんそへおほしめぢ給ふ。
白あふはなふくへうこうる物をふれバ。越渓の女
漢宮の姫也織為寒小袂雁行染為江南春
水衣一対直千金汚泥粉汚不再着なと
どさ袖くの比し念どをしてぞし給ひとてなく
とまうてやてようきこゆ人へふとうしもこれバ比い

かうやつてでまかしとてみなさまのくがいさへぞひ
きみぐれてついで給ふてはうじをふくでとこ
とおもひ出し給ふかしとてこううこされとみ給ふ。
うしてみづ御まいる給はひ給ふで忍びかくまし
くおりしくなむ御ぞいつで給て日ぐれぬまで
まさ給むなよ御つり給ふ中ぐらうらまい
ら世給ひらうひてうぐうハびたどのよくうてら
世給ひぽさやかつてのりんのとのみちへなべ
なぐのふかいしまもとどのくほうまうりまに
給うつちものだらうそん恵みう命みなさまひのさ給う
の給ざもわれ君さ御ぐかうこそくのひて世給ふ

おのがはそひかぎりそうじうめでたしぱ給ふこ
しの人へどのふとそハぱと御わまいしかい
御なぱさで御ふれをくおまへの君わかとさ御ま
御とのしまあまさうあもいれず。ぱうろくまので
がなからしきんとみんてさせ給ぱなかうひ
ふまうハたくし御すめでたし。ぱ御世どもちくも
とくとみんてまつり人さへみなぐらうし君
人よいのまさうきてらなむし　しきなあ

海のうへか
れいでうわまこになりせい俗まくにおいてうどかゝく
まくうちかんとしてまだいのお風がみてちかくれ
ぞ海つりて、おもふそ海つらく。ゆどをとくす
あまおりし比かの海中にかのおろかずりて亭あち
ごらうちてこれれいでうあ例時にあふまごとあん
あきろうちはまてくれいでうに海つりてあんそれ
海の雲をばかしにあきてさゝみあくさ海にひん
がしさお十よろのかうく晴さのれいでうあり。
さう見のかくぐ名ご所〇のいろあり。舩びのう
あわみがこぞ〇ありはまへのくあいぬにせさへ

こんのうしろやうにゆきてちびひめごとふら
てれもおがことをとへてぴろくのそ徳どられて
みゆそむしろごれもうてわさもきせ所へ
かまきこみわよあそだれさこひんげ一のそうぐ
のきびくぢやふ恋どうせ所のうつとふ志兄
しがさとそ狩どうせ所つぴそろがふわよう
まてみしぐさうぴ初んまんざいのわきさ海を
かまわうへいとしごうの狩んがのぶらおうへいへ
さひごあひ千狩んの曲へわるひへおりのき兄ぜん
ちきさふおひおるひいきやうぎのへおうひるさ
くいさうのりのぴどこあひの志おくふわさびひて

ぢくらくのむらひとえさるさこれはおやうぢやら
ひくうがとみ曲みぎごあうひくもふの室てひつつく
どもあかしてぶやうじやのりとふおり海とぴ兄
おんせつしまんざひとさきてどもふきさあるさ
所どろくのがされ志やうし曲とんどもうさうく
志もくうなびはうへぞう所ぢあやをんふくの
こわもえひさうまべ弐香ふ明ひ志そうかきて
ぐぜひ海うらくみふさうまどバ恋ちれひうらく
臣めもうぴしうごんの志ま臣うあうひつうとぞうて
志海ごんのやうううおうきぐへもれさりぴ黄金
春ふ安産して志曲ゆせのあるも臣敗れぶふご

くらくはふかしうけさあかうおんふめとひら
くあひさまんざいふおあそてとむきふれど
ありおおひハそのくどく水さそてとうく重
んげおいさりぞのへふかをおし重にちかう
さはこれやすかれひとこゝろもじめぶんと見し
うまおのひハ三十二さうおんくめふみて六つ
三めうそあくまたりけせ見んそ海つりゆら
とききくとこれ耳くなりめなりこれよう
えんぶなりんぐぐなあ重とみ西よ経げめでた
しあ経ふ文を嫁さハあげーきんづちりあん
のわかつ重と海ぬう重さうびのちく八年のさじつ重

御うありかぽはのふかえらうびやしのくあり。
あむせんとしてこれハおんぞうあくあり首から
あま重バみくとくごあうこんぐのこあ重バあし
御うおりしあしごどふせかうまやうこんなをし
ひさそてぶんぐひのくうひハふゆされぬのちの近
ごうのひこゝじきとあんいあ重バかぐうんのやうよ
てとあうへのうげさへうりて見あ重バ。ゑゝさ
のくおまごゝみ
くりまうなくみなきうくゆのうそてあみふさ
とりそねぐさえりのふぞおりくろひんぐしのひさ
しれなみの海ふぞそのくおまへの近経んじめの

とゝろかせさせ給ひつゝ二たびやくそくのはなや
うしをひとへにたのませ給ひて、ごらんみなされしんで
のたふれそさせ給ひて、うへみまはず、さる御かく
御なげきせ給ひつゝひとところおもし御もとへなり
のひとふさふくうちのはざのよそごすがり
あがりもとうり御さまの花札むかしの三はしへぞ
けうさせ給ひてうへに一やくぞくりのくろんけんさ
うさせ給ひつゝ申○の右が○のさうがりし
すんぽうあ三八ぶやりおかすべし二で○のぞれ
きかめさへさせ給ひて、なりもはなかはいふる
でし三ちらからありどさく給ひつゝ御いひ

そろへみえてめでたし火舎ふくびかりそとさ
せ給ひつゝ花束のそやかであかされはなやう
うりの御ざうべしそれふみうらさふさへみ
あきごうへまはれまてもうたくまつてきつさあろ
は勝とさせ給ひつゝ、それまでの御花あるべし
りやの中の極のりにふ、ぞ見あるくとくとぞ給
給ひつゝともしひさいりてそやふかそけいかみ
御とぶ中のまはれさへいくござおやま中よらい
じんそてあらせけのへおやまへよらでんの姫
れふさうはさ二まおれさひとれもえてめぐり
くそまつりさせ給ひつゝとのくそけのへおやまへよ

一そちなにせじざいわうぶつさいごくのあひくとくそそ
まうしせじざいわうぶつにくらかくいろくのえ
あれそごあくわりてそてすへせじざいわうぶつは
さけせよそ海はまばおやうろくのみざいよ
らひさつうめうおんへ一さいあつもりろくのはう
うべきみどりのいろみえいう眉あり光毫は
みざふめぐりてかんにせうことふ須弥のご
とし。せへまんげの海あり二つ大海を合へ
はくちびるは頻婆くわれどもしこひさうさ
そのくしん海ぞんのうへよりおきての月あり
あくむしそのこうやうおくさふくせんあ

海しくおきうとてしこめうあいしんいろくのさ
うがうぐぐらく志ゆつてり。ぼうらけたひとと
おかしてぷうらやうさびひよてしゆゆうら
これもおからむろまんどくのひやうをとろ
さころあり。おひのさう八海あこふおらがんお
んさうはらしよおりぐせいさう八ねりそてよおり。
あいさやうあさうはそのひかりよおりまぼんづく
のさうはつさうひよおりも。ぷ糸のさう八海あこ
ふおりとめうかうくさのさうはふくさいまお
りもぷさうびがんむのちやうのさうはさらぬまおり。
卜りきさむねのさうはさらぬもろふおりもぷ大

定智照のさうハ息よあるとさんかよ各く
めいさうハさぶさふあり。實ふちとじやくめいの
てらであのをあり。これゆへよ徳さふちゞくぺし。よ
ろんの寿命じやうハたとあらぞら。これ三ぢんそく一
の寿ある。張弘ふ又さうがうらうえうやうあり。売
ゆんぞくあんまんさうがうらうえうやうあり。
そくぜんうあるゆへよ。これあんかよおへさうると
いあさあちりこれあさあろゞゆへよ。これをさう
ぐうらうえうやうとよふ一念一香中道よあるまずと
いふとあり。とさう沁あさを海さくくの
でとし即三道みぞ列きの可涇とのりとする

三昧ハくさうにして一さいふけあらくらうかよしん
ねんせいし。おあしこんぢさあつて一海の海う
ら一ぞされて一さ世沼ろり。そのくら一まえんけ
をさうげて一さ世沼ろりぞてんし一らう一世沼るる。
一ずいの流ようひろくのぞとし。とんやふ弥あ
らそ世沼ろろどぞ沼よおひ一ら一とのぶへさ
ふあらびけりんさ為くの偈よ云若有衆流生
来發菩提心一得聞佛名変定成菩提海
たもくさうのむとを却よくとうとて。やらし
の中ふあるてんして。まぐめとけの流あどさ
かぐぢしゆへあり。ぢろとまれくうぞう。て

けとみえて御つりつかふせかりけんやと相も
ひでおのしこそ御つるぞえちらもそのうとをしう
このそしみて九郎のはてしらとゞめて中さ
れ給ひてまさらじめて二代は孫九郎のところよ。
ひんがしに御よひ世にはつぱ〇ぶこのいてよ情
ふ給とけ言世にて御孫んがりのこゝ給ぞし
こ言世にづきふあるぞ御孫んじものところ
人か世にておくらく御わへやせこゝ給ふ
またみたるさ九郎八これ九郎わへなどまかそ
てはうそてまつる世にかるなるべし。さての
さうかきこのいづとのりて御しやうじそもにく

ぞくのこ給だへおう家ぞもく世にてずゝとども
かけくつてぬる事さはもゆてしやくのこ人乃
けづか〇とみそこ事に代はざるのはすへのくさふ
ちがまうけのくふくらんとくりしてそのりと
ふさうひ給ふらんしるあそで二ぷんまんく家
のそなざをこれは世にてつぱ御孫んじものおりよ
御いりあひされはおくらくふ御いりさんまて
らもとはふくふ日れい候どふまへの御孫
んかりとそでくらそくらし御いりあいまか
みぞそく御いりをべ。秋仕堂童子あぞいさつ
つぞくのし御いりことそのとんとまうぬまじぞ。

そのゝおまへハおりく御ねぶつそれともしらるゝわくのなど
ゑおまへ御念仏をとなへられましておのづからそ念
どはやく御つとめおりく御せバそれほどうの衆
さもありさふに殿ハ拝んずのもどう御めぐれバその
の、おまへをさしめさそて御つとめ二千へんづゝ
めぐり給ふのやうにみえなられてもよりあはせて
おもてにあそこふ見なのおましハへのおまきみな
かを投げてまちてしらさせ給ふに見やうをいはん
おそてあれなりおまるみまして三時のとなへやつ
ひとはやく御つとめふくぐうらんとの給
それをましバどのゝおまへを見るじきこ御身なりとの

給ひぬハいのちでなるましバ極ご寺のかなりの
ところぐのうかいのかわりのぞもさてあれて道
の都りふうきゝともめてさうらへぜをとどうち
なりバ拝んぞいろ系ひびきそこのいのちもを
根ハ力著提なん八世道とのいとさきらしやまひ
りなくなさけの系まさなれバ尊ま本もちてみ
なのりをとくとこさる御王聚浄戒あさましくど
それのせをもどあくさよ、ねびおけんにれん
なふのかれをみなめしぬとおりあば拝ん然
つまてくるみれそうの御やうてくろいそどう
さうさ見よぷるぐのごぶとのさそて御つのと

ころからずあのはなぞどくびをさせましてぬれ
じどのゝおまへはござるのとおどくおはなせられて。
へこなたしらで御へ出ぷ候のどころふ御あんがりきんと
のならばさればこそのなりまはらくふへてせまぬ
どのゝおまへ様んがりのせさ給ますそ氏がからへだ
んよそう二人はそでぬるかのとこそまゐるから
がじふいらあひの子〇おもろくなされば〇の
のおまぎみ
まふられておきとをおりさふこのきうと
ばさおば様今様〇の事られおかゝおまへど
かゞとあらぬてろくあかぬまへばお仕みかう

しりそ御なりて、おまへのとこふつまさそ御つら
まきはおかけのはひけりてぶかつやさまさまを
てぷさそ御つるあらりを御ば御ゆへぷどのは様ん
御のもそへりそでおせましてそぷおけ、おがもふて御
はうせ様まに面善円浄如満月威光猶如
千日月声如天鼓俱尸羅故我頂礼弥陀
さる人くはしくは御ありられぱそでさせ給ぬで
のおまごをこちあそれたのことくふみておふる。
へのお様のうちにおやそぞをちごてをあらと
御御こゑふようわあまし。どのゝおまへの様なり様の
うらにあてらのおかけのあうられ給つるまゝう

わめきなどいひて。若人欲了知三世一切
仏應當如是観心造諸如来とうち誦し
てゆびでぬこれおまへさらくらくあるもしれバ。
りふくよみいふぞ中川ささらにいゑある。おま君
のりしみとまうもぬりのあそこひてうちきんと
てもぞ。これ仏ぞうのあしとひひて念まう
うあしこさりのふ、おまへうぢれさわいゑある
わまぞもいゑりくたくゐもあびぞ。これ御ざるど
のおさまもみずうおもて仏とも見えてまゐ
らあそくぞ。これ仏ぞうのこさきみなまうはうと
ともあらわうさるもしぞうらうのひでこそあどう

ミさゆきめしとむみ給ひぞござ。これわすこころあんまま
でばくうづけらるべしとぞどしろあるそんに
みあさうでとよろはばくらおらまさうと。ぼさ
まとあん地とむしくバござれなうる給ぞそぞびへ
ほくねぎらござやのは地獄のおもとよ海いりおろさ
おいひてぞ。これおころをしてかくお給りくあくめぞ
さ御こさくおぞふぞうのあくをうまてくそうけ
ら海のおまござみ
のゆきとおりゐあ給の姫これおきもあくさう
のよをうまてかうきやさ。阿闍の井のおまござみ
いふくハはらくこそこしそらの孫のうまうき

きえぞりのくにの西にごくらくへはあまたみだうくたちけれ
だいばくおしましゝとらへ給ひてやむろにおし
こめとうらふしてあざられまどとをひ給ひしみち
よとひとよ中と、ゐりひしみだうのあきらふいらず
ぼうかりしとらへ給ふにそてしぬ、これあわれにき
こさんひらりまつのもとにらよ給ひくまうりて給く
くらゝつし山にのぞてあんよそて見まくてあはうきん
ぞけるがあるこされのはさしとそりて給ける。さ
とぞいふ。ゐんしうみ田みなこ大りんらうりて給
ひまいばつ八月廿日の給じゞはくつうりかけの月の
ひかりのゆかりのことくしうめでたくみえ給れむ

これまで西せんのおくにのうかおりいやうまと
こゝも海さしけのかゞみの海しあかたげとそ
どあらう月をしそくめでたくされバあさく
うや御しつぎ立ちをめるけるよう
けあやそるあらあけの月ぞこのおまざとも
期そろそとしけのくれふかるひそむお
ひまあけの月を見へそゆきだけ海のおま君
をみえけよまあるありあけの月とそて よ
しのひかりと、おりひ海うる観無量寿経に十
六想観おひしそらまとてよそへらまし日のいけの
めぐりも中志海にざうくの、おまへのせんざいへ。

ばやの座の御まへにさゝげさせてありがたきけ
のやうらくにかおりひよう〳〵てめでたし。さらにここ
ろくらりわたらせてなかをさながら〳〵とさまゝ。
かの中りんのみなとの〳〵ふぴひきさげさのさ
まやらなりければおもはせ。八三まいしてぞでう。
いさ給ひつんぞてゆかしをみおもしのひろ給ひつ
まみそて。轉法輪のざふきうなるさま。念ぶんい
とさやかにそてざりふのりてさせ給ひけるを。
ひろめうおりて御とぞせけるぞそうくひとく
よ給ひさせ給ふ。おもつき給ひんもどうきよきを
ひ御まてめでたさうつんてさせ給ふ。されけせ

わしゆんの清浄光明のつきもをそよ
むかふへつて拝ぎさげたまふをおまよしろのさ
まらいひをおいて給ゆく歩ぐにもえつそでしまいばう
まつきゆのもとよめとさ御しばらくにお御
さしあざみのばりてものこにおぞ御かれと
て。我昔所造悪業皆由無始貪恚癡従身
語意之所生一切我今皆懺悔と誦あそてお
みざぶりに御つりきしばせほうのおりなり
きのしわなうまつりしおりひみつにのありてれ
もけせみそて御つきばむきのきゆうやうのやかや
こそずちうのひよ御んじ給もんとみて給ひぬ

わうじやう要集のりんと、おりひかの。七宝荘
ごんしにひざまづきまんだくのそう容
を御らんじ。一しんの道をさとりて如來の御心
かんずるかねごとなすそれ。など
ととぞんじあそばさればこんさんげのこゝろ
ありとなり。いまこうこうそう。そのうちなかまへのは
しなのまさに御らんせられあらざるまゝにさえ
るもぐとをそへしなよきさだめたるの道去
來玉仏眉間白毫相好隠密九品識界今
得仏と稱しるいまこうしきみうておりるを
みおまへちゝこれ例時にまいるあふしとぞう

こらみかどへさしやれどみまひのよろの
おさはめのうとなづらへまてとりそまいらせた
まへこれおまさらみかどさらなざしいありと
をこれをはゞくしえも御ぢきれぢらなりさ
しるかどもひあうこれなるなれどさくしめ先と
しよりてゆひしまかそりてまいましばおくれども給
てら御なる給のとをせ給をりぬやびうあつ
と御まくられますあるおぢりまるこあるくと
つかそ勤仕めしてそるをもるはらよいかるな
くそこのおまよ
おさ御これいうごとそろうもまあど

これらをみな仏法ぞとてさげすみ。どらへバおぢやら
うちにひいてかうくわんやとやせバそのかた
まへ々にしせうとの給ハなされバおごりも
こみがらあはしめてよる衆生おまもりとそやお
ありがたよ仏法をさうれんどいふよそそくさら
これおまごゝハぞんぜごしやすめそうゝさおまかう
いふハ法経のところのざるあるもぐうのお座
といひてともとえてしうあまとやせそうして
あらかねされふとしうぎやうがきバさやうざ
うれひしのこまりとなりて人くるまい
とよくて十方仏土之中以西方為望九品来

之間雖下品應足といふことを。仏書にてみて
とありていひたれバなんぞ。その座おもしまお
ぼんはつ月のかくゆくとあひをうれ孝武帝の
せうしやうのこれや御くりしの御たんもぞあと
みざりがして御ゆくてうらやまとくころいとよ
わらさとくそ仏法ぞくへおそまいり法てよく
いひきかせてみを法〆二どえそてまいりしかぞ。
あふみとも〆ぬいてかつりといへだ。それぞやよまいら
てさくいまかんぞそんでうはう。ぼうしおなせよ
いにといひてひつ法のお経のころあかう仏どう
そぱうて法いうてみまう。さんまでぐうよりそゞめ

てあそびあそぶおそはいりてうれしきにまうしが
さいの十二らいとハいひて稽首天人所恭
敬阿弥陀仙両足尊在彼微妙安楽国無
量仏子衆囲遶とハおがまるゝそゆへなりてなむ四
十八ぐわんみだ如来南無因位果満弥陀如来
南無無量光仏南無無辺光仏南無清浄
光仏とやらいふをよくとなへてそれぞれによみまゐらせば
中大きくとうめいしうかいの御ん摩訶毘盧
遮那とこれをいへりそれぞれげんさやうのりんを
ひとさまずおやうじあみだとひろまるなとか
ほけてそゆうづう一切のところまで遍じ給へ

まづそのみほとけの所住のところとハ常寂光
とておなじく浄波羅蜜の菩提無常のところ
我波羅蜜の無行せるところおがまるゝのと
ころ常波羅蜜の無相とめでたきところ
楽波羅蜜のところゆえの性に所住せる所有
仏無仏の諸法の性とさだまる所始なりまで
なり解脱なり。なりしもんやそこれなり
などもありひとはぎをとひこれおさらぬとはら
て又大堂にはいりましパ三ずでこのなれなる
うそこればほとけの諸法とこなひ給ひ
そんぞうさんみなおぶそうぞうそめでたきこと

もろのあひじしやうかたらく。かけとこ
こそ給つきハ降三世軍荼利のたまへり。大
威徳金剛夜叉不動尊ハおなじくのたまふ大日如
来へ金剛夜叉ハこのたまふなりけるところまでろ
よ。十六尊やらはふかいとの如きをさせるなれあ
りとさ給ふあふそびくおそ給ひぢふみさ給
給ふ一時よかげ弥くせさ給ぬさみてさせ給ふ
不動尊るハされどすゞしいさせ給ふからず
そもそも金剛薩埵のくんとおもとも。お生
生加護のあめをいふとおもとみへ。又見我
身のあんぱぢひをも断悪修善なる。だ

給ふなども祈りさせ給ふ二そのひとさせて
御こしあ井の方のひらなんの。のおまへのあ
ごうのこさひわそまりしをこばみあるのこさひ
えかうあそくにとさあるくるさせ給てよ
せとゆうせ給ふうかくうきそくうれるひさ給
どめてくしひんぶのこさひハさ給ぐいろく
のこさせんざいふもとほくさせ給ふさき三み
これらく…のあもとゞまるご。御むご
あまさくうるをあかとけて。おりしぞふく
おりし御をがしてますこおそいとそてみられた。
あれはぐうのひんぶしのがこふみりんばの岩

ひでひらのさんぞんはらくやうどのなかと
してめでたさぞこめてそれぞとのには
かさなりそう。きんぎんかねまいらすをばかぎなく
ことのぎし君達おかたい名月しなみおかたく
えのこねおかをかりごねをぞくなくさうべさ
みやうがりくもりおいまでもて四ねんあまりる
してりのそとにもいぢめしきみなかいきべき厨
子ぜんのさはくをばたまざき下﨟男どもや
なにそれのこすみとりあけさらなし
びくのばさくきさみなをおかんなりくふね
なしてかりのくししやうくめのものまふびれと

なかのよろくごりのさとりのそではぐさまいり
うきとばおまへなくいうぐうよきぞじめでたく
おんなでなくいらしまいらせ候てぞおんのうち
のそうだうをもおくがせ候ますこれぐの受
けどものこおもいこなくのそあくさなどりそ
はぐさないらせまいらせばおなじうちやくよいち
なかいらせ候。候ぞうのうちのそうさうにはいらせ。
又御所さまみなでよ候せなどせさせ候まさ
千阪などいふかのとめしいぞ。いはかりまでど
をひくをのふ候。氏さんげいんの若子君
やうなりめしおいめくいばなをのくみぞな

どなたもすべし。ゆめゆめつくるゆみいるべしなどめて
おほせらるゝを。ご法でござる。それだに
みちの守のそこ御あるもの也。まおほく
まゐらするなどといひてかくしざる法さま
のけども。などでござれどもすなはちそのきい
なむあみだぶつのまことはそのやうなる。まのこ
御いりてこれが。此十方諸仏を云集。説他方
道俗并声聞縁覚十二因縁声聞四諦
習覚説などご法で御ありしや。おほくのやうに。おるとも法
とこれが法さまのゝめでんの法道論そさ
なくさなふおざるともなにきとのみなでいふ

いはんや。そよきいかせば。それこそとありて
さきこそおつきは。おそれみきうちても
うち御はなみあきらめ。さきとんきうとん
とお法して。我生て尽未来上らう法
けなふ仏を生ずいることせせのさいたとお
んらくいくとうちおがさこそ御つりておさき
ともを見ては。ちか日法経ともそれおざらん
そして十二因縁をぞらして。さ法くさざやらことも
とこなふおるとも法と見ては。六度まんぎやうの法
經とてぞし故。陥んとなきそ衆さすらし十人
だちいてよきこそ御つう。まさにあるとも法せ

如来ハ大ゆきさかれどもいけそ説つりて。
みなきこえたしとしこそ説つるおるところを
みなばにんぐうとうけてそまつりてあともこの維
摩居士の維摩とをとこかふ御さめるとし給
と如来ハ御くしこぶやうの涅槃経
まさわるところを如来ハ。そくに三十人あつまりて
涅槃経を十まきあらはすのでんほんしてよむ御さ
あるとりこそすも如来ハにかれし七八人計教とおも
せて倶舎と稱し唯識論とうふべるそう
ずうと如来ハいひてぞあろ、おのうぞもせんド
りんと稱しあるひくきるやうとよむかつめつみ

てぞのくとよろくしまとそのへよをを稱しの
の亊とらうれし給ふ。このとと如来ぞさ説くま
こ事ぞそのふとられとく。ごとうす亊てわハ
亊よそうそく見出すまゐうぞどもうくこそよ
とぞくうつてまさいてうとしわるところ
どみ如来バ。ゆゑのゆうして。そく三十人あを
のくまるみあるところど如来バ。がれし四五人あそ
はあらけとはうらくそ説つるぼさほぞうそ
うく如来ぶるのくあすてはうそまつる。の
う給ハ疏くしぞうのそくをおハげしとうそせ
沿めらづるとくいもとさとくハおばいらがう

みなさまのあそびて候がく。おまゝごとのまゝに
かゝるとき御あそびこゝろえんとて。御だめでたき
うゑく。こひくよ世のつねざるみくことなりて
ゆくよう。らひ神んかんのおかんがや。ひろなれ
りさやとさ候くのはしぐをあるべくそれハ今宮
よりそのはよりひあるかくとしもそれおま
だ。はちみどどのよろこべ、おり御せいご月に
いそうごあるるうこそつ。さいあんとさ候ぐまま
めしうてもとおりてゆくよ。はかさめしようら
ねまきかるの三の中ぶるう中ふどんまふる給
ぬ。た。あんじのゆくく候ひよ。ひのいわまさら

てうひあうさ候よおはらるべし。その月をつう
さめしのよあそび。こしみかくしと見りそゆく
めるに。中るものちふのおはふのみずくぼけよ
しのりハこのさきさのよ。中なきんどのもと
ぬまよ。二月廿よ日にちうる大いそでこそ候
けぬいろんずきつかりゑくきぶるかし。よのそ今も
おひひさこあづ候し。みはへまて世役丈ねう。
うの御つりをと次かうぬ給どみかくぐらかく
おはうるべし。おはふのみずをあさ海して候
けみしたまくいうなことあとゝろそぐお
ばせどうひあし。給ぞうよう遊びお候御う

みやこへのぼりきこえさせ給ひしをおもふ。こゝに
こゝらのさ海ぐのばせうもくしげくおほきなど
やくそくしうちにさしてふもあまねくさまにあり。三
月ぎりは四て日三百ぎんとひせよ海つ給ふ。
又さんのさんのりのりけり御詞もぞかしこよりとのり
をまたひめみやのおんとまことにかならずそれより御ま
さるまじくそうらうぬすとをるのはいなきにこのゑとを
さしまゐらせとゝおもへば御かたんじうきつるこそ
いせのおもひにさくはつけてさぶらふ并
の御ことおかりけれども人々のよもすがらにおしあ
ばこそしつらしまんがんこのり

内閣文庫
和書
類
號 二七四七三
冊 二一
架 二〇三函一五
(十九)

国立公文書館
National Archives of Japan